

多文化保育における保育者のストラテジー

- 横浜中華保育園を事例に -

きし あきのり なが え ゆ き
喜始照宣 長江侑紀

〈要 旨〉

本稿の目的は、下記の2つの問い(RQ)について、長年にわたり多文化保育を行ってきた横浜中華保育園を事例とし、おもに保育者へのインタビュー調査をもとに明らかにすることである。特に本稿では、保育者ストラテジーの観点から、保育者の問題対処の仕方を描き出す。

RQ1：外国につながるのある子どもに関して、現在どのような問題が生じているのか

RQ2：保育者たちは、そうした問題に対して、日常的にどのように対処しているのか

分析の結果、以下の知見が見出された。第1に、横浜中華保育園では、認可園への移行後、園環境及び子ども・保護者の変化が見られた。子どもや保護者の文化的・経済的背景の変容である。特に幼児クラスでは、新たに中国から来た日本語が分からない子どもが増加していた。第2に、そうした言語に関わる問題に対して、保育者は、「子どもは自然と慣れていく」といった乳幼児観に基づき、過度な援助・介入は行わない、「見守る」基本姿勢をストラテジーとして採用し、子どもの成長・発達、自発的な互助に委ねた対処をしていた。第3に、それと同時に、同僚の保育者や園長、幼児、保護者といった「他者」を資源として活用する「協働ストラテジー」を駆使し、日本語が分からない子どもや保護者への対応という、日常的に生じる問題の解決も行っていった。また、協働ストラテジーは、園内の限られた構造的条件の中で、保育者が自らの目的・目標を達成する上で有効に活用されていることが示された。

〈キーワード〉

多文化保育、中華系保育園、外国につながるのある子ども、ストラテジー、インタビュー

I. 問題関心

国勢調査によると、平成 27 年現在、日本に住む外国人人口は 175.2 万人であり、日本人人口は減少する一方、外国人人口は増加傾向が続いている¹⁾。国籍別に見ると、「中国」が 51.1 万人と最も多く、「韓国・朝鮮」(37.7 万人)がそれに続いている。平成 12 年調査と比べると、外国人の国籍別人口構成は大きく変化し、「中国」籍の割合はこの 15 年間で 10 ポイント近く上昇した。また、都道府県別には、東京都(37.9 万人)、愛知県(16.6 万人)、大阪府(15.1 万人)、神奈川県(14.5 万人)、埼玉県(10.5 万人)で外国人人口が多く、それらの都府県だけで同人口の半数以上を占める。ただし、実際にはこれ以上の外国人が日本で暮らしており、法務省「在留外国人統計」によると、在留外国人数は 223.2 万人(うち中長期在留者 188.4 万人)にも及んでいる²⁾。

しかし、日本では、外国人受け入れに関わる諸制度の整備が十分に進んでいるとは言えず、日本で生きる「外国人」は教育・仕事・家族に関わる様々な問題に直面している。教育の領域に限っても、外国籍の子どもだけではなく、国際結婚の子どもや長期海外滞在経験の子ども等を含む、外国につながる子どもの教育・保育の問題について数多くの調査研究が蓄積され、問題提起がなされてきた(小内編 2009 など)。特に近年は、おもに義務教育への就学準備、学力の基盤形成、格差是正対策の観点から、「外国人の子供に対する就学前段階での支援の重要性」(国立教育政策研究所 2015: 78)が指摘されている。そうした流れの中で、日本の幼稚園・保育園を利用する外国につながる子ども・保護者の現状と支援の課題等を扱った調査研究も進みつつあるが、その一方で、多文化保育状況における保育者の実践それ自体に注目し、かれらがどのような手段・方法を採用することで、外国につながる子ども・保護者との間に生じる問題の解決を日常的に行っているのかを明らかにした研究は数少ない。

以上の問題関心から、本稿では、中華圏につながる子どもだけでなく、多様な文化的背景の子どもの保育に、半世紀近くにわたり取り組んできた横浜中華保育園を事例に、教育社会的観点から、保育者と外国につながる子ども・保護者との関係性を分析する。また、特に保育者の視点を重視し、かれらの日常実践における問題対処の様相を描き出す。

本稿の構成は以下の通りである³⁾。まず、Ⅱにて、多文化保育における保育者の日常実践に関わる先行研究を検討し、分析視角とする「ストラテジー」概念を提示する。つづくⅢでは調査の概要を説明し、Ⅳで調査対象とする横浜中華保育園の基本情報をまとめる。Ⅴでは、同園における保育実践上の問題とそれへの保育者の対処について分析し、Ⅵで知見の整理を行う。

Ⅱ. 先行研究の検討と分析視角の提示

1. 先行研究の検討

1990年代以降、多文化保育に関わって、多くの実践報告や実証研究がなされてきた(大場ほか 1998, 卜田 2013)。そこでは、外国籍幼児をはじめとして、外国につながるのある子どもの幼稚園・保育園での適応過程、特に日本語の獲得と仲間集団の形成に関する研究がおもだっている(柴山 2001, 山田編 2006, 菅田 2006 など)。

他方で、多文化保育における保育者の態度や意識、保育者が感じる実践上の課題についても研究が進んでいる(宮崎 2011, 卜田 2013)。近年のおもな調査研究としては、保育士の情動面での問題対処としての「異文化間トランス」に着目した新倉(2002)、言葉が通じない中での外国人の子どもと保育者のコミュニケーション生成を描いた久富(2004)、通訳の支えと多文化共生保育の理念のもと、保育者たちが多文化保育の難しさを感じながらも、外国人児童—ここでは日系ブラジル人児童—受け入れに肯定的であることを指摘した品川(2011a)、さらに「日常の保育」と「文化の保障」の視点から、保育者にとっての通訳の役割と意義を論じた品川(2011b)がある。また、内田(2013)は、新人保育者のライフヒストリーをもとに、外国につながるのある子どもとの出会いを通じ、保育者たちが新たな認知スキーマを形成する過程を描いている。

このように各園や保育者個人は、外的な支援・援助が限られる中、試行錯誤しながら、日々の保育実践を展開していると言える。しかし、例えば、上野ほか(2008)が「外国人保護者と保育者の間で、当事者の努力にもかかわらずコミュニケーションの問題が生じることが多い」(上野ほか 2008: 150)ことを指摘するように、外国につながるのある子ども・保護者とのコミュニケーション問題は多文化保育実践においてしばしば生じている。

では、保育者たちは、外国につながるのある子ども・保護者との間に何らかの問題、特にコミュニケーション問題が生じた際、日常的にどのような実践を行い、それに対処しているのだろうか。また、そうした実践はどのような制約・条件のもと可能となっているのか。これらについてプラグマティックな観点から検討し知見を積み上げる必要がある。もちろんこれまでも多文化状況における保育者の問題対処に関わる様々な事例が紹介されており、例えば、本稿と同様、中華系保育園を事例に、多文化保育特有の課題と保育者の対応について検討を試みた研究報告(和田 2016)等もある。しかし、既存の研究では、末次(2012)が保育所における障がい児への「特別な配慮」の実践を例に示した、保育者の実践やトラブル対処が「現場に居合わせる人々(メンバー)の相互行為により、常に状況依存的・協働的に達成されるものだという」(末次 2012: 228)視点からの分析が十分になされていない。さらに、園や保育者を取り巻く構造的条件や彼らが有する資源・背景の差異による保育者の問題対処のヴァリエーションを描き得る、参照基準となる分析枠組みや概念が定まっていない。そのため、保育者による問題対処の諸相を抽出し比較分析するための分析視角の提案も既存研究の課題として挙げられる。

2. 分析視角の提示

このような先行研究の課題に応える上で、有力な軸となる概念が、教育社会学において用いられてきた「ストラテジー(strategy)」であると筆者は考える。ストラテジーとは、稲垣(1992)によると、「行為者がある制限された状況のなかで自己の目的や関心を最大限に実現していくための戦略」(稲垣 1992: 99)のことである。この視点からすると、学校や教室内での教師-生徒関係は「教師と生徒がそれぞれの状況定義にもとづいて目的や関心を達成しようとしながらも合意を求めて交渉する過程(negotiation process)」として把握されるが(稲垣 1992: 99)、そうした過程における、限られた資源や構造的制約の中で、教師が「なんとかかやっていく」、その能動性・主体性を描くのに有効な概念が、教師ストラテジーなのである。

学校教育における教師のストラテジーを扱ったおもな研究としては、教師が「理想の教育の実現」のために編み出す「ペダゴジカル・ストラテジー」の諸相を描いた清水(1998)、教師のストラテジーとしての感情労働を描いた伊佐(2009)、〈ヤンチャな子ら〉と教師のストラテジーのせめぎ合いを描いた知念(2012)等がある。また、多文化教育に関わっては、日本のある中学校でのニューカマー生徒の「差異」をめぐる教師が用いる「差異の一元化」と「差異の固定化」という2つのストラテジーを描いた児島(2002)、アメリカの小学校において教師が多文化教育の理念実現のために用いる「多文化ストラテジー」を類型化した額賀(2003)がある。また、額賀(2003)では、「英語を母語としない」児童に対して教師が用いるストラテジーとして、「リソース活用型」・「ハンディ克服型」・「エクイティ演出型」の3つが抽出されている。

この教師ストラテジーのアイデアは、もちろん就学前段階での教育・保育にも応用可能であり、保育学分野でも、近年、保育者ストラテジーに注目した研究がいくつか見られる。しかし、それらはおもに感情労働に焦点を当てたものであり(中坪ほか 2011, 中坪 2014 など)、また本稿が関心を寄せる多文化保育の状況における、保育者ストラテジーやそれによる問題対処のヴァリエーションを分析的に提示した研究は管見の限り見当たらない。

よって、本稿では、多文化保育に関わる問題が生じた際に保育者が駆使するストラテジーについて、保育者へのインタビュー調査をもとに明らかとする。その際、卜田ほか(2015)による、園内の多文化状況の違いによって「保育の目標」や「保育の中での取り組み」に多様性が見られるとの指摘を踏まえ、まずは事例を長年の多文化保育での実績がある横浜中華保育園に限定し、園や保育者が置かれた文脈を考慮した上で、保育者の語りの分析を行う。

Ⅲ. 調査の概要

本稿で用いるデータは、2016年5月～6月に筆者ら2名によって実施された、横浜中華保育園でのエスノグラフィック・インタビュー調査より得られたものである。横浜中華保育園の概要は次

章(IV)で説明するが、同園は横浜市中区にある認可保育園であり、古くから「中華街振興の裏方的な存在」としての役割を果たしてきた(『神奈川新聞』1980.05.05 朝刊)。

筆者らは、上記期間に5回、午前10時から午後3時頃まで同園を訪問し、保育活動時間での参与観察、子どもの午睡時間での保育者インタビュー、そして園が作成・保管する関連資料の収集等、トライアングレーション(方法論的複眼)の発想に基づき調査を行った。同園での調査は、横浜における中華系幼稚園・保育園調査の一環として、今後も継続する予定である。

今回の分析では、保育者のストラテジーに主眼があるため、特に保育者へのインタビューから得られたデータを活用する。インタビュー協力者は、園長、全体主任、0歳児から5歳児クラスの保育士6名(各学年から1名ずつ)、専科講師(中国語、英語)2名の計10名である。かれらのうち、園長先生、保育士Aさん、専科講師2名が中華文化圏につながりを持っている。また、保育士Bさんは中華学校出身、保育士Cさんは大学時代に中国語専攻であったことから、中国語による日常会話が可能である。インタビュー協力者の基本情報は表1の通りである。

表1 インタビュー協力者の基礎情報

No.	名前	性別	担当クラス	保育士歴	出生地	学歴	インタビュー日
1	園長	女性		15年以上	日本	短大卒	5月26日、6月16日
2	主任	女性	フリー	15年以上	日本	短大卒	6月8日
3	保育士A	女性	0歳児	5年以上	中国	短大卒	6月3日
4	保育士B	女性	1歳児	1年未満	日本	短大卒	6月3日
5	保育士C	女性	2歳児	1年未満	日本	大卒(通信教育で保育士資格取得)	6月3日
6	保育士D	女性	3歳児	15年以上	日本	短大卒	6月8日
7	保育士E	女性	4歳児	10年	日本	短大卒	6月8日
8	保育士F	女性	5歳児	10年	日本	短大卒	6月16日
9	講師A	女性	中国語	なし	台湾	大学院卒(台湾)	6月16日
10	講師B	女性	英語	なし	マレーシア	大卒(マレーシア)	6月8日

注：保育士歴には、他所での勤務歴も含む場合がある。

インタビューは、事前に質問項目は用意するが、参与観察での気付きや語りの内容に応じて柔軟に質問を行う半構造化法によるものであり、保育園内の職員控室にて行った。おもな質問項目は、1)保育者の出身背景やこれまでの教育・仕事経験、2)保育現場における保育者や子どもの様子、3)園児の家庭・保護者との関係、4)保育者としての現状・将来展望等である。インタビュー時間は一人当たり30分から2時間程度である。また、そこでの会話内容は承諾を得てすべてICレコーダーに録音され、その音源をもとにトランスクリプトを作成した。

なお、以下では、調査協力者の個人名はすべて仮名表記としている。ただし、園名に関しては、園長先生から承諾を得て、実名公表とした。また、本論文の内容についても、園長先生をはじめ関係者の方々に、事前に確認をしていただき、一部修正を行った。

IV. 調査対象園の基本情報

本章では、対象事例である横浜中華保育園の基本情報を説明する。具体的には、1)横浜中華保育園の概要と沿革、2)教育・保育の特色、3)勤務する職員、4)園の利用者について、関連する文書資料やインタビュー・データをもとにまとめる。

1. 横浜中華保育園の概要と沿革

横浜中華保育園は、横浜市中区にある認可保育所であり、横浜中華街の一角にある台湾系の横濱中華學院の敷地内に立地する。周辺地域には、大陸系の横浜山手中華学校とその系列の熊貓幼稚園(現在は認可園のため、附属園ではない)、中華保育所(「保育園小紅」)等がある。

同園は、1969年4月1日に、おもに華僑華人の子どもたちを預かる目的で設立され、開園当初は横濱中華學院附属の保育園として運営されてきた。しかし、1988年に横濱中華學院から分離した後は、1997年に「横浜保育室」(後述)の認定を、そして2013年には「横浜市認可保育所」の認定を受け、現在は横浜市からの補助金のもと運営されている。そのため、入園の申し込みは、横浜市中区役所で受け付けされる。保育時間は、平日は午前7時30分から午後7時30分まで、土曜日は午前7時30分から午後5時までである。園児の受け入れは生後57日目から5歳児まで、定員は92名である(2016年現在)。横浜中華保育園の沿革は以下の通りである(表2)。

表2 横浜中華保育園の沿革

年	
1968	横濱中華學院の新校舎落成に伴い附属保育園を開設。
1969	保育園の開園。2・3歳児のみ受け入れ。
1980	園児22名在籍。
1985	園運営が軌道に乗る。園児62名在籍。
1988	県の指導により横濱中華學院から分離運営。名称を横浜中華保育園とし、新理事会のもと運営。
1996	保育時間を大幅延長。0歳児より受け入れ開始。
1997	横浜市より横浜保育室の認定を受ける。
2000	横濱中華學院100周年記念事業の一環として新園舎建設。
2003	4・5歳児クラスを開始。
2004	獅子舞に続き保育園児による龍舞の指導を開始。園児112名在籍。
2005	園児121名在籍。
2010	4・5歳児クラスを廃止。
2013	横浜市認可保育園と認定。4・5歳児クラスの復活。
2016	園児102名在籍。

注：提供資料及び園長インタビューをもとに作成。

2. 教育・保育の特色

つぎに、教育・保育の特色を述べる。横浜中華保育園では、子ども一人一人の個性の伸長を目標に、子どもの発達に合わせた、様々な保育プログラムが用意されている。また、体操、絵画、リ

トミックに加えて、中国語、英語、龍舞・獅子舞(中国・台湾の伝統芸能)が専科としてカリキュラムに含まれており、中華街がある地域特性と中華学校に隣接する保育園としての特徴を活かした保育実践が行われている。

年間行事としては、日本の季節の行事(七夕やひなまつり)や台湾の行事(中華民国双十節)、クリスマス会が開催され、運動会や夏祭りには保護者も参加する。また、横浜市や横浜中華街の地域イベントにも参加し、龍舞・獅子舞を披露する機会が多いため、幼児クラスの子どもたちは発表に向けて日々その練習に励んでいる。

園内で、先生は「老師(中国語で「先生」の意)」、クラス名は中国名-例えば、3歳児クラスは「大班」、4歳児クラスは「幼獅班」、5歳児クラスは「麒麟班」-で呼ばれている。また、3歳児から簡単な中国語を教えており、あいさつには中国語と日本語が用いられるが、普段の会話はおもに日本語でなされている。保護者へのお知らせ等は、基本的に日本語と中国語の2言語で作成・配布される。

3. 勤務する職員

2016年現在、横浜中華保育園には30名の職員が在籍している。勤務する保育士の人数・構成は時代によって異なり、例えば、1980年当時はおもに2・3歳児の園児22名を「中国人二人、日本人一人の保母さんが入り交じって面倒を見て」いた(『神奈川新聞』1980.05.05朝刊)。

現在の職員の背景は多様であり、中には中華学校の卒業生や中国への留学経験者も含まれる。また、他の保育園(幼稚園)での勤務経験を有する者や家庭での子育てを経て復帰した者もいる。数年前には男性職員もいたが、現在、保育士全員が女性である。勤務する職員の年齢幅は広く、保育士の勤務年数は15年以上から1年未満(今年度採用)となっている。近年は新人保育士の採用が目立ち、養成課程修了後、初職として同園での保育士の仕事を開始する者も少なくない。なお、専科の担当スタッフは、保育士ではなく外部講師であるが、かれら全員が中華文化圏出身であるか横濱中華學院の関係者である。

ちなみに、同園の園長先生は、華僑4世として横浜中華街で育ち、小学校時代を横濱中華學院で過ごしている。短期大学卒業後、同學院に体育教師として3年間勤務した。その後中華義荘(中国人墓地)を所有管理する財団法人中華会館に勤務する傍ら、横浜中華保育園の事務を請け負った。1990年園長に就任した。園長就任後は、2013年の横浜市認可保育園への認定に向けた活動に尽力し、保育関連の研究会・研修会への出席や地域の人々との交流も積極的に行ってきた。

4. 園の利用者

横浜中華保育園は、先述のように、おもに中華街で働く華僑華人の子どものための託児所として、横濱中華學院の一室を借り開設されたことから、開園当初は華僑華人の子どもが多く在籍し

た。しかし、例えば1980年の「神奈川新聞」(05.05朝刊)で、同園が「全国でも珍しい国籍混合」の保育園として紹介されているように、開園から国際的に門戸を開いており、華僑華人の子弟だけでなく、韓国や欧米等、多様な国籍の園児が当時から在園していた。また、「多文化」な環境を求めて通う日本人家庭の子どもも利用してきた。ちなみに、同紙によると、当時の園児数は22名、うち11名が日本国籍児童だった(『神奈川新聞』1980.05.05朝刊)。

2013年以降は、認可保育園へ移行したことにより、市の行政規定に従い各家庭の労働・経済・住居状況と家庭の希望等参照し、同園へ利用者は割り振られるようになった。この点で、同じ就学前教育ではあるが、横濱中華學院に直系で附属する幼稚園部の利用システムとは異なる。

2016年現在、受け入れ定員は公式に92名であり、0歳から5歳までの102名が在籍する。園児全体のうち、約49%が両親のどちらかが外国籍となっている。ただし、日本国籍の園児であっても、両親どちらかが外国(特に中華圏)につながりがある場合も少なくないため、実際には数字に表れる以上に多様な文化的背景を持った子どもたちが同園で共に過ごしている。

V. 分析の結果

1. 子ども・保護者の文化的・経済的背景の変容

IVで確認したように、横濱中華保育園は、特に中華街とその周辺地域に住む華僑華人の子どもたちを中心としながらも、多様な文化的背景の子どもたちのための保育実践を長年にわたり積み重ねてきた。そして、園長先生が語るように、子どもたちにとって「ホントに安心して過ごせる場」を目指した保育実践を行ってきた(2016/5/26園長インタビュー)。

それでは現在、同園における保育者たちは、外国につながりのある子どもに関わって、何らかの問題に直面しているのだろうか。また、もしそうであった場合、それはどのような問題なのだろうか。本節では、この問い(RQ1)について検討する。

まず、横濱中華保育園の歴史の中で、現在の園環境への変化に影響する出来事、「転機」と言えるのが、認可保育園への移行である。同園が認可保育園となったのは2013年であるが、認可園へ移行した経緯を、園長先生はつぎのように語っている。(【】は調査者による発言、[]は筆者による補足、……は中略。以下、同様。)

【もともと華僑のための保育園だったんですね?】そうですね。華僑のために、学校の建物が出来た時に、場所があるから、じゃあ地元の、その働くね、女性のための園を開きましょうって、初代は子どもを集めにいったくらいです。「保育園出来たよ、ここに入んなさい、入んなさい」って。**【今もそれはずっと引き継いで】**うん、引き継いでるっていうか、やっぱりここは華僑がまず入れなきゃいけない。だから、認可するか迷ったんですよ。認可するのは、自分で子ども選べないから。全部区役所通して要件でみて来るから……それでうちはとっくに

認可出来たんです。こういう建物出来た時に。でもそこでは認可を申し込まなかったんです……でも最後にそれじゃあもう時代に置いてかれちゃうんで、っていうことで、ホントに遅くなって三年前に認可にしたっていうことですね。【置いてかれるって、どうい】つまり、どんどんみんなが認可になって、で、横浜保育室って制度がなくなっちゃうって毎回言われてたんです。うち、横浜保育室って、横浜独自の政策によつての補助金もらってたんです。でもそこがなくなっちゃったら自分で自立していけないから。だったら、じゃあなれる時にやりましょうっていうことで認可になったんです。それと、やっぱり外からもね、無認可ってのは聞こえがよくないんですよ。なんで無認可なんですか。じゃあ、うちがね、条件的によくないんですかっていうことになっちゃうんですね。そうじゃなくて、うちの立場的にね、ここを売るような感じになっちゃうんですよ、学校からすると……[中華學院の]関係者の子どもが入れないのって。それじゃあ困るっていうこともあるし。(2016/5/26 園長インタビュー)

横浜市によると、「横浜保育室」とは「児童福祉法に定めた保育所(いわゆる認可保育園)ではありませんが、横浜市が独自に設けた基準(保育料・保育環境・保育時間など)を満たしており、市が認定し助成している認可外保育施設」であり、「3歳未満のお子さんを助成対象とした施設」のことである⁴⁾。IVでも指摘したように、横浜中華保育園は、横濱中華學院の建物の一室から始まった経緯があり、地域の働く母親のための保育園としての役割を長年果たしてきた。しかし、今後も継続的・安定的に保育園運営を行っていくためには、認可園への移行は必要であったこと、またそれは同園にとって苦慮を伴う決断だったことがここで語られている。

では、認可園となったことで、具体的にどのような変化が起きたのだろうか。大きな変化の1つとして挙げられるのが、子どもやその保護者の文化的・経済的背景の多様化である。以下の園長先生の語りを見てみよう。

うちの場合は、子どもたちは色んな国、基本的には日本の子が多いですし、日本語で全部やってますから、そういう面ではね、日本の保育園と変わらない。でそこで受け入れてる子どもたちは、昔は短かったんです、時間が。今みたいに長時間じゃないんです。だいたい9時3時、とか9時5時だったんですね。それが、段々と正式に日本の、認可を、補助金をもらうためには長時間やらなければいけないってことで、ある意味パートの方の保育園だったのが、正規の職員のね、フルタイムの方のね、なったから、時間が長くなった。そういう面では色んな対象者が入ってきたんです。子どもたちの。前は、ホントに地域の方の子どもだけ。それが、東京方面[で]働く[方]とか、それから、公務員の子どもさんとかね、色んな方が来たから、それぞれ立場の違う子どもが来てますけども。子どもはみんな同じです。それからあと、年齢も、ある時期2歳からだったんです、うちは。それが、1歳0歳って伸びてきて、でまあ、その対応をしていって、それから、昔、4歳5歳はなかったんですよ。2歳3歳だけだったんです。4歳5歳は幼稚園に行ったんです。うちの中では。隣の[中華學院附属の]幼稚園。(2016/5/26 園長インタビュー)

ここで語られるように、横浜中華保育園は認可園への移行を契機として、働くパートの女性のための就労・子育て支援を目的とした地域密着型の園から、職種・就労形態・居住地域等の点で、多様な層の人々を内包する園へと変容していったと言える。ただし、園長先生が「子どもはみんな同じです」と語っているように、そうした利用者層の多様化に応じて、保育方針・理念や子どもへの対応の仕方がそれまでとは異なるかたちに大きく変更されたわけではない。

同様に、横浜保育室の時代から同園で働く保育士Fさんも、認可後に、子どもや保護者の家庭環境が複雑化したことを語っている。また、それに伴い、各家庭の同園に対するニーズも変質してきており、保護者の中華文化継承へのこだわりも薄れてきている可能性が、以下の語りから読み取れる。つまり、これまでの中心的な利用者層であった中華街とその周辺地域の家庭に加えて、あるいはそれに代わって、「中華」保育園としてではなく「保育園」の機能を享受するために利用する様々な家庭の子どもが横浜中華保育園に通うという現状が生まれたのである。

3年ぐらい前から認可になったんですけど。それまでのお母さんたちはやっぱり、中華街で働いてる方とか、中国語をがっつり教えてもらいたい方みたいな、ほうが多かったけど、認可になってからは、ちょっと変わってきたかなって。……近いし、どこでも入れればいいとか、ちょっと、園舎がキレイだからとか……中国語にこだわりなく入ってくる方が、中華文化にこだわりなく入ってくる方が多くなったかなと思います。……【結構、親の層が変わったっていううん、だいぶ変わりましたね。……認可になったら複雑な子が入って来るよって言われてたんですけど、やっぱり、家庭環境様々な子が入ってきましたね。(2016/6/16 保育士Fインタビュー)

さらには、認可保育園となったことで、またそれに伴い受け入れる子どもの年齢層が4、5歳児まで拡大したことで、小学校入学を目前として、新たに中国から来る子ども、つまり日本語が分からないまま入園してくる子どもが、無認可園(横浜保育室)であった頃と比べると、増加する傾向が見られるという。先にも登場した保育士Fさんの語りに見られるように、園内における子どもの人種・民族構成の変化は顕著である。

【認可後に]中国から来る人も増えた感じなんですか?】も増えましたねえ、ほとんど日本人だったんです、ここ。【あ、そうなんですか】前は。ほとんど日本人、7割ぐらい日本人で、あとは、アメリカ、イギリスとか、あとインドの子もいたし。イランとか、色んな国の子どもがいたけど、今、ほとんど中国人か日本人かみたいになっちゃったんです。(2016/6/16 保育士Fインタビュー)

認可保育園の場合、各家庭の経済状況等に応じて保育料が決定されるため、来日後まだ生活が安定していないであろう新たに中国から来た家庭であっても、子どもの入園先として横浜中華保育園を希望し、選択するようになったのだと考えられる(下記の園長インタビュー参照)。

無認可の場合はね、保育料がある意味一律なんですよ、そうすると、中国から来たばかりの人は、まだ生活が安定してないからね、うちの保育園に入ると、保育料が高いから、選べな

いんですよ。でも認可になったらもう、安い人はもう、0円でいうことはないですけどもね、高い方が7万円、一番安い人で5千、1万円って、その幅があります。【ああ、だいぶありますね】そうなんです、だから、中国の人が選べる、認可になってうちを希望するようになった、っていうことで、増えてます。(2016/6/16 園長インタビュー)

子どもや保護者の文化的・経済的背景の変容の中でも、特に日本語が分からない子どもの増加は、子どもと保育者のコミュニケーションに関わって、新たな問題を生じさせており、乳児クラスよりも、幼児クラスにおいて、こうした問題は顕在化しやすい。例えば、3歳児クラスの担任である保育士Dさんは、日本で生まれ育った華僑華人の子どもたちの場合、日本語が話せるため、子どもとの言語的コミュニケーションにおいて問題はないが、言語習得が目覚ましい幼児期の「中国語しかしゃべれない子」の場合、中国語で話しかけられても「おっ分からぬ」と対応に困る場面が増えたことを語っている。

今ほど、中国人っていう子がいなくて、昔。中華街に住んでる華僑の人は確かにいらっしゃったんですけど、だから、日本生まれの日本育ちなんで、日本語みなさん通じてたんで、逆に今の方がすごく中国語しかしゃべれない子が多くなったなあと。昔は先生も、中国語を覚えなさいよと言われてましたけど、そんなに使う機会がなかったんですけど。やっぱり年齢が上がってくると、子どもも普通にしゃべるじゃないですか、日本の子も3歳ぐらいになると。なんで、それによって、5歳までいると普通にしゃべってくるんで、おっ分からぬみたいなのが最近増えました。(2016/6/8 保育士Dインタビュー)

ただし、幼児期だけでなく、言語獲得以前の乳児期の子どもの場合でも、家庭背景によって、園環境への適応の面で違いが見られ、保育者は対応を工夫しているようである。例えば、これまでおもに0歳児と1歳児のクラスを担当してきた保育士Aさんは、中国から来たばかりの乳児で園環境に慣れるまで時間がかかる場合もあることを、つぎのように語っている。

【子どもの背景とかで、園の馴染み方が違ったりするとか】……お兄ちゃんとかお姉ちゃんが元々ここにいて、いた子とかは、下の子も結構早く慣れるっちゃ慣れる。お迎えの時に、一緒に来たりとかそういうのと、あと保護者同士でも知ってる方がいたりとか……でもなんか、関係あるか分からないけど、中国から来たばかりの子は、やっぱり普通の日本人の子よりは、時間かかるような気がする、言葉も慣れない、環境も全然違うみたい、その中にぼーんって放り投げられて、私なんでここにいるんだろうみたい、そういう子は結構時間かかりますね。【それは0歳児とか1歳児でも?】0歳児とかはない、1歳児はありますね、結構ありました。……泣いたり、あとは、ぼつーんと、離れてる感じ。最初慣れない子はみんなそうかもしれない、まあ、そんなにかわりはないですけど、時間はかかりますね。(2016/6/3 保育士Aインタビュー)

2. 保育者の乳幼児観に基づく「見守る」姿勢による対処

このように、横浜中華保育園では、横浜市認可保育園への移行後、子ども・保護者の文化的・経済的背景の多様化に伴い、新たな問題が生じている。特に日本語が分からない園児の参入は、保育者たちにとって対処すべき日常的な問題と言えるが、保育者たちの中で中国語によるコミュニケーションが可能な者は、園長先生を含めても、3、4名程度と限られている。在籍する保育者の多くが、日本語による対応を基本としているのである。そのため、例えば、職員会議の際に、中国語が話せる保育士のいない3歳児クラスの先生から、子どもに日本語での指示が通らないことに対する「不安」が語られることがあるという(2016/6/3 保育士Cインタビュー)。

では、保育者たちは、この言語に関わる問題に直面した際、園内の人的あるいは体制上の制約の中で、どのように対処しているのだろうか。以下では、この問い(RQ2)について、保育者ストラテジーの観点から検討する。

第1に指摘できるのは、保育者たちは、日本語が分からない子どもに対し、常に特別に扱う—例えば、中国語を多用したコミュニケーションを行う—のではなく、その子どもが保育者の指示に無反応であるか困惑している場合等に限って、何らかの援助や介入をすることである。つまり、保育者たちは、ストラテジーとして、過度な援助や介入をしない、いわば「見守る」基本姿勢を取ることで、日本語が分からない子どもに対応しているのである。例えば、1歳児を担当している新人保育士Bさんは、入園当初「何をしたいか分からなくて不安で泣いてたり」する子どもに対しては、中国語で指示する等の「援助が必要」だが、「子どもたちも覚えが早いので」、その後は特段の配慮はしないことを語っている。

子どもたちも、例えば、単語単語が分からない時は、「こうしようね」みたいな感じの中国語が、私もまあ少しぐらいはしゃべれるので、こうしよう、ああしようみたいな。でも子どもたちも覚えが早いので、ちっちゃいので、もう言えば、あっ、つぎはこうやるんだなっていうのが分かって、今はほとんど必要ない感じなんですけど、やっぱり最初入園当初は、そういった援助が必要でした……【しゃべれるしゃべれないで、ちょっと対応が変わったりとかありますか?】そうですね、私のクラス、一人しか、しゃべれない子が一人しかいないんですけど。そうですね、やっぱ、先生の言ってることが、最近では分かってるんですけど、最初は、うーん分かってないんだろうなー、何をしたいのか分からなくて不安で泣いてたり、して、でも、中国語で言うと、えっこの人中国語分かるっ、中国語分かるっみたいな顔して、話を聞いてくれたりして、はい、それで、ああこうやるんだあみたいな感じで、他の子と一緒にやったりしてますね。(2016/6/3 保育士Bインタビュー)

また、このストラテジーとしての「見守る」基本姿勢は、保育者自らが(養成課程を含めた)過去の学習・実践経験から獲得した乳幼児観、すなわち「子どもは自然と慣れていく」という考えに基づき編み出されたものであると推察される。例えば、4歳児クラスの担任である保育士Eさんは、「子どもの方がもう言葉覚えるのが早いので」、中国から来た日本語が分からない子どもが、「日本人」

の子ども集団に来園当初混じることが出来ていなかったとしても、時間の経過とともに日本語を覚えていき、自然と輪に入っていく様子を語っている。

4歳児は、みんな、新園児がないので、みんな持ち上がりなんですよ、だからその、クラスも別に、子ども達もまとまってるし。でもやっぱり、日本人と中国人は分かれて遊んでます。……たぶん言葉の壁なのか、うん、かなと。コミュニケーションが取れないからやっぱり【それが、年齢が上がっていくとか、時間が経つにつれて混ざったりはするんですか?】あ、混ざったりはしますね。……子どもの方がもう言葉覚えるのが早いので【ってことは、中国の子が入ってきて、日本語を覚えていく】そう、覚えますね【逆はないですか?】日本人の子は中国語あんまり【あんまりない?】ないです。たぶん日本語が飛び交ってるから、たぶん中国人の子が覚える。……たぶん、1年ここ通ってると、結構もう、自分の思い、嫌だったら嫌だとか言えますね。(2016/6/8 保育士Eインタビュー)

他園での保育士経験もあり、長年保育の仕事に携わってきた主任の先生も、先の保育士Eさんと同様の乳幼児観を援用し、「子どもの方がすごく、発達が早いので」、それぞれの子どもは言語を早々に習得し、園での生活に適應していくことを語っている。さらに、この語りでは、子ども同士の「通訳」をはじめとして、自発的な互助が子ども間で生まれるような園環境が横浜中華保育園にはあることも同時に指摘されている⁵⁾。保育者が、長期的な視点を持ち、「見守る」基本姿勢を取ることが可能となる背景には、子どもの成長・発達によって萌芽する自発的な互助が関係しているのではないかと考えられる。

ホントに自分が中国語しゃべれたらいいなあっていうのはやっぱり、春先、やっぱりお父さんとお母さんと離れてて、子どもたちが何かを、ほら、やっぱり、訴えてるけど、それがちょっと理解できない、だから、他の先生に通訳してもらって、あつ、何々がほしかったんだーとか、そういう感じ、でもし言葉が分かってたら、その子に対する言葉かけが出来ただろうなっていうのは、そういう歯がゆさはあるんですけど、子どもの方がすごく、発達が早いので、もう先にもう、子どもたちの方が、おかわりーとか、ちょうだいとか、トイレーとか、うん、だから、先に子どもたちの方が覚えちゃうし、で、段々、おっきいクラスの子も……中国語も日本語も両方出来る子がいると、通訳みたいな感じ、それこそ英語でも通訳ね、〇〇ちゃんとか出来るから。(2016/6/8 主任インタビュー)

なお、このように日本語が分からない中国出身の子どもに対し、中国語を多用するのではなく、「見守る」姿勢を取り、子どもが自然に適應することを促す保育者のストラテジーは、つぎの保育士Fさんが語るように、日本語習得という点で、中国出身の保護者のニーズに結果的に応えるものもなっている。

【普段、ここで[子どもに]接してるときは、みんな一緒な感じ?】そうですねえ。たぶん、その中国から来た子は、日本語、お子さんを日本語が話せるようにさせたいって思ってる、と思うので、お家でも日本語をご両親が話すようにしたりとかして下さってるみたいですし、私が中

国語が話せなくても、それはそれで大丈夫みたいで、日本語が話せるようになってほしいって言うてましたね、家では中国語を話すからって感じ。(2016/6/16 保育士Fインタビュー)

また、大学で中国語を専攻していたため、中国語による子ども・保護者への対応が可能な新人保育士Cさんも、「日本語をお子さんが覚えてくるのが嬉しいっておっしゃってました。こんな言葉も言えるようになってみたいなことを連絡帳に書いてる、もう1から30まで日本語で数えられますよとか。園で色々単語とかも覚えてくるので、嬉しそうです。」と、子どもの日本語習得を喜ぶ中国出身の保護者の姿を語っている(2016/6/3 保育士Cインタビュー)。

3. 「他者」を資源として活用した「協働ストラテジー」による対処

以上のように、保育者たちは日本語が分からない子どもに対し、必要以上に援助・介入するのではなく、「見守る」という基本姿勢をストラテジーとして採用することで、子どもの発達・成長の早さ、子どもの自発的な互助に委ねた保育上の問題解決を行っているのである。

しかし、当然ながら、保護者への対応や円滑なクラス運営等を行っていく上で、保育者たちがそれぞれ個別に問題対処するのみでは限界がある。また、子どもの成長・発達や互助に委ねているだけでは、日々の保育実践の中でたびたび生じる言語的コミュニケーション問題に即座に応答することは難しい。では、日本語が分からない子どもや保護者に関わって、何らかの解決すべき問題が生じ、それに対する迅速な対応が求められた際、日本語による保育を基本とする保育者たちはどのようなストラテジーを駆使するのだろうか。本節では、横浜中華保育園の保育者たちが、そうした場面で、「他者」を資源として活用した問題対処を行っていることを指摘し、かれらが駆使する協働によるストラテジーの有用性を示す。

まず、横浜中華保育園の長い歴史の中で醸成・維持されてきた園文化の1つと言えるが、園内外における様々な立場・背景の人々—保育者、子ども、保護者、地域の人々—の間での互助関係の成立である。それは、園長先生の「現場が大変なところは解決を一緒に入ってやりたい」という語りに象徴されている。また、こうした互助関係を築く上で、月に数度開かれる職員会議やフロア会議の役割も重要であり、保育者たちはその場で日々の保育実践で直面した課題や問題意識を共有し、しばしば立場に関係なく議論を尽くすこともあるという。

[保育士の先生への声かけについて、]クラスによって、やっぱり「このクラスはちょっとまだ年齢小さいし、なるべく泣かせないように」、で、個別に預かってってってっていうことで。あとは、年齢大きければ大きいなりに、外から来た、外国の子たちに、分かんない子にはね、もっともっと丁寧についてあげてとかね。……[一人担任制クラスの]4、5歳にはね、もう、特に5歳児いっぱい、外国、外から新しく入ってくるんで、そこには、出来るだけ、お手伝いってうかね、現場が大変なところは解決を一緒に入ってやりたいなあっていうことはあるんですけどね。(2016/5/26 園長インタビュー)

こうした園内の「雰囲気」の中で、おもに中国から来た日本語が分からない子どもとの間に言語

的コミュニケーション問題が生じた際、当の保育者たちは、中国語の話せる同僚の保育者や園長、バイリンガルの幼児たちに「通訳」を依頼し、迅速な問題解決に取り組んでいた。こうした「他者」を資源として活用する保育者の問題解決の方法を、ここでは「協働ストラテジー」と呼ぼう。つぎの保育士Dさんの語りから、保育者は協働ストラテジーを駆使することで、日本語が分からない子どもへの対応・交渉を上手く進めていることが指摘できる。

【3, 4, 5[歳]で、中国語しかしゃべれない子が来た時に、園の、教室の中の様子とかってどんな感じに変わりましたか?】中国語がしゃべれる先生がいれば、対応してやってくれるので、その子もそれなりについてくと段々日本の子ども、ちょっとずつ遊べるようになってくるんですけど、今、私、今年3歳児なんですけど、今年1階の[幼児クラスの]先生が、誰も中国語がしゃべれなくて、みんな2階[の乳児クラス]にいらっしゃるんですけど、で、3歳児で今年、入ってきたんですよ、新しく、5月に。で、中国語しか分からないって言って、未だに分からないんですけど。……今現在それがとても大変で、なんで片言の、何回か中国語講座で習った、私の拙い単語でぼそぼそ言うと、何となく動いてくれるんですけど、本人の、もう3歳だから色々言いたいこともあって、それが分からない時は、園長先生を呼んできて、「何か言ってるんですけど」って言うと、「今これをやりたくなかったんだ」とか、「もうちょっとおかわりがしたかったんだって」とかって言ってくれたりして、「あっそうなんだ」って言って、じゃあってつぎのことが提供出来るんですけど。園長が、ちょっと用事とかで外に出掛けてると、いないので、さあ困ったとかって。で、3歳の子、うちの子ってその、中国人の子がいて、お家では中国語をしゃべってるんです、で、保育園来ると、日本語でスラスラしゃべるんです。で、3歳の子はまだ通訳出来ないみたいで、言ってることは分かるんだけど、それを「分かるよね」って言うと、うんうんって言うんだけど、「何て言ってるか老師に教えて」って言うと、うーんって言って笑ってごまかすんです、なんかそこが、つながらないみたいでまだ。……[なので]4歳と5歳の子のクラスに行くと、5歳児の子の方が多んですけど、「ちょっと〇〇ちゃん、〇〇ちゃん、通訳してくれる?」って言って、「ちょっとねえ今から外に行くから帽子を被ってって言ってくれる?」って言ったら、うーんって言ってくると、分かって持ってきて被ったりとかしてくれて、「ありがとう〇〇ちゃん」って言って。で、園長先生いない時は、今は5歳児の子が通訳してくれるんで、その子を頼りにしてます。(2016/6/8 保育士Dインタビュー)

また、外国から新たに入ってくる子どもの割合が比較的高く、一人担任制である5歳児クラスでは、子ども同士の自発的な互助に期待するだけでなく、円滑なクラス運営という目的・目標の達成を目指し、保育者自らが協働ストラテジーを日常的に発動しやすい状況を生み出す努力をしているのである。保育士Fさんが語るように、子ども同士の交流の機会を増やし、そうした人間関係の中で、日本語が分からない子どもが自然と日本語習得を出来るよう、席替えの際等に、子ども同士の「通訳」が機能しやすくなる工夫をしているのである。カリキュラムが増え進学への取組も重要となる5歳児クラスにおいて、意図的な協働ストラテジーの活用とその条件整備は、保育者が「うまくやって

いく」ための有効な手段となっている。

【子どもに言葉教えてもらったりってあるんですね】ありますね【子ども同士で通訳するとか】してもらってますね。【してもらってるんですか、自然にしているのか】自然にしてもらう、してくれてる時もあるし、例えば、今日、新しい、席替えて新しいグループになって、やっぱりグループ、そのグループに、何にも話せない子のグループには、話せる、通訳してる子をつけたりとか、英語、英語の子も中国語の子も、そういう風にはしてるので、やっぱり、私の狙いとしては、教えてほしいなっていうところはあって。【ちょっと横にいてもらうとか】横に、そう、隣の席にしていますね。【へえー、そうすると、自然と、日本語を覚えていったりとか】そうですね、出来るだけ私が、目を向けやすいように、一番前の席にしたりする子たちは。(2016/6/16 保育士Fインタビュー)

さらに、中国語の話せる同僚の保育者や園長、バイリンガルの幼児たちだけではなく、保護者の協力のもと、日々生じる子どもや保護者との言語的コミュニケーション問題に対処することも横浜中華保育園では少なくない。保育士Dさんが以下で語るように、お迎えの時間等で、日本語が分からない保護者に子どもの様子やお知らせを伝える際、同僚の保育者や園長に手助けを依頼できない場合には、保護者同士の「通訳」に期待し、活用することもあるようである。

[私のクラスの]中国語しかしゃべれない子[の場合]は、[その保護者の方に]「今日こんなことがあったんだよ」って言いたいんですけど、送り迎えがおばあちゃんなんですよ、で、おばあちゃんは全然日本語通じないので、こっちが、「今日すごいヨーグルト和えが好きすぎて、3杯も食べたのにまだ食べたいって言って駄々をこねて、5歳児さんに通訳してもらって、やっとおやつが終了したんだよ」って伝えたかったんですけど……結局その時は伝えられなくて、でも……大事なお知らせとかっていう時は、園長先生なり、夕方の延長[保育]の先生だったりを、「ちょっとお願いします」って言って、通訳してもらったり、あと私が困っていると、お迎えの保護者の方が自ら、私は何も言ってないんですけど、先生がこう言ってるよって、親同士で通訳してくれたりして……「はっママありがとね」っていう感じがあったりしますね。【お母さん同士の助け合いもあるんですね】そうですね、おばあちゃんと私が……お互いうーんって困っていると、ちょうどお迎えに来た方で中国語が分かる保護者の方は「水筒の中身がなくなっちゃったからって老師が言ってるよー」みたいなことガーって言うてくれて、で、あと、「洋服がないんだって」とか言うてくれて、で、言うと、おばあちゃんが、「あー分かった分かった」みたいな感じのニュアンスを言ってる、で、おばあちゃんもどうーと何か言うから、「明日持ってくるって言うてます」って言うから、「あっありがとうございます」って言うて、いうことが多いですかね。先生も、誰も、たまたまだ一れもない時は、保護者の方にまで、あの申し訳ないんですけどちょっと通訳していただけますか」って言う時もあります。(2016/6/8 保育士Dインタビュー)

このように、中国語での会話に限界がある保育者たちは、子どもや保護者とのコミュニケーション

で「通訳」の必要性を感じる場面において、中国語による対応が可能な園長、同僚の保育者、幼児クラスの子ども、さらには保護者といった「他者」を資源として活用する協働ストラテジーを用いて、言語面での問題解決に取り組んでいるのである。また、この協働ストラテジーの活用は、園内の限られた構造的条件の中で、保育者が自らの目的・目標を達成する上で、保育者個々による対処以上に有効な手段としてあることを、これら保育者の語りは示している。

VI. 結論

以上、本稿では、多文化保育における保育者のストラテジーについて、保育者へのインタビュー調査をもとに検討した。具体的には、横浜中華保育園を事例とし、1)外国につながるのある子どもに関わって、現在どのような問題が生じているのか、2)保育者たちは、そうした問題に対して、日常的にどのように対処しているのかについて分析を行った。

その結果、1)横浜中華保育園では、認可保育園への移行後、同園を利用する子どもや保護者の文化的・経済的背景の多様化が進み、特に幼児クラスにおいて、中国から新たに来た日本語が分からない子どもの増加が生じたことが示された。すなわち、そうした子ども・保護者との言語的コミュニケーション問題が、保育者が日常的に解決すべき問題として立ち上がった。そして、2)保育者たちは、これへの対処ストラテジーとして、「子どもは自然と慣れていく」といった乳幼児観に基づき、過度な援助・介入は行わず、「見守る」基本姿勢をとる問題対処を行っていた。しかしそれだけでなく、中国語による会話が可能な園長、同僚の保育者、バイリンガルの幼児、さらには保護者という「他者」を資源として活用する「協働ストラテジー」を駆使し、かれらに「通訳」となってもらうことで、日本語の分からない子ども・保護者との言語的コミュニケーション問題を解決し、自らの目的・目標を達成するための日常実践を展開していることが明らかとなった。

このように、多文化保育の点で経験蓄積が豊富な横浜中華保育園においても、近年の認可保育園への移行に伴い、多文化保育に関わる新たな問題に直面していたが、その中で、保育者たちは、多様な立場・背景の人々との互助的関係性を基盤とした問題対処を行っていた。ト田ほか(2015)は、園の多文化状況—特に「差異の可視性」の高低—によって園の「目標」・「実践」が異なることを指摘したが、今回の事例は、そうした園の多文化状況が、時代背景や制度・組織面での変化から少なくない影響を受けることを示唆している。多文化保育実践の多様性を理解する上で、さらに多層的な構造的条件を組み込んだモデルの提案が今後必要だろう。

また、本稿の知見からは、多文化保育実践を行う上での「互助」・「協働」の重要性が示唆された。これまで「保育者の相互支援」や保育士と他の専門職との連携(「インタープロフェッショナル」)を語る文脈で、「協働」の重要性が指摘されてきたが(久富 2012 など)、本稿で見た通り、同僚の保育者に加え、子どもや保護者といった「他者」を資源として活用することで、保育者は柔

軟に、即応的に日々の問題対処を行いうる。また、保育者たちによる日常的な協働ストラテジーの展開は、子どもたちの自発的な互助にも影響し、「相互理解を志向する関係調整の試み」(末次 2012: 228)としての機能を果たしている可能性も考えられる。もちろん子ども・保護者の負担の問題もあるが、多文化保育に関わる施策・支援が不十分であり、保育士養成課程での多文化保育に関わる知識・スキルの提供が必修でない日本の状況において(宮崎 2011)、このような互助性を基盤とした保育者ストラテジーの展開は、保育者の実践を通じた成長を考える上で重要であり、多文化保育を通じた新たな協働の創造可能性を示すものと言えるだろう。

さらに、本研究は、教師・保育者のストラテジー研究に対しても、新たな視点を提供する。なぜなら、これまでの学校を舞台としたストラテジー研究では、個々の行為者たちの日常実践を描く際、かれら各々の「なんとかやっていく」側面に力点を置いてきたため、立場・背景の異なる多様な「他者」を資源として活用する協働ストラテジーという発想は十分でなかったからである。しかし、限られた資源や構造的制約の中で、保育者が自らの目的・目標達成のために、「他者」と協働で問題対処する姿を描く本研究は、個人に帰属するストラテジーから集団の協働性を説明する可能性を見出しており、新たなストラテジー概念の用法を示唆するものである。協働ストラテジーの観点から、教師・保育者の日常実践とそれが可能となる社会的諸条件の関係性を明らかにしていくことが今後重要なテーマとなるかもしれない。

最後に、本稿の限界と課題について述べる。まず、本稿では、横浜中華保育園という一事例をもとに、おもに保育者の語りのみから、保育園における多文化状況を描いたことに限界がある。今後は観察データも活用し、さらには他の幼稚園・保育園との比較を行うことで、日本の幼稚園・保育園が抱える多文化保育に関わる諸問題、多文化保育における保育者のストラテジーの諸相、そして保育者と子ども、保護者といった行為者間でのストラテジーのせめぎ合いについてもより詳細に描出する必要がある。また、本稿で、人種・民族等に限定されない、子ども・保護者の文化的・経済的背景の多様化が保育現場にもたらす影響について検討するには限界があった。そのため、それらの限界を乗り越え、多文化保育の現状と展開可能性についてさらに深め考察することを今後の課題としたい。

〈注〉

- 1) 国勢調査に関わる記述は、総務省統計局(2016)「平成27年国勢調査人口等基本集計結果」(<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon1/pdf/gaiyou1.pdf>)を参照。
- 2) 総務省統計局HPより「平成27年末現在における在留外国人数について(確定値)」(http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00057.html)を参照。
- 3) 本稿の執筆に際しては、長江がⅠ・Ⅳ章を、喜始がⅡ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ章を担当した。
- 4) 横浜市「横浜保育室のご案内」(<http://www.city.yokohama.lg.jp/kodomo/unei/hoikuseido/file/ysitufutankeigen.pdf>)を参照。
- 5) こうしたバイリンガル児の自発的な「通訳」は、多文化保育の現場ではしばしば生じることであり、例えば、中華系保育園での保育活動の観察(ビデオ撮影)を行った研究報告(榊原 2016, 山名 2016)でも指摘されている。

〈引用文献〉

- 知念渉：〈ヤンチャな子ら〉の学校経験－学校文化への異化と同化のジレンマのなかで－，教育社会学研究，Vol.91：pp.73-94，2012。
- 久富陽子：外国人の子どもと保育者とのコミュニケーションに関する一考察，保育学研究，Vol.42 No.1：pp.19-28，2004。
- 久富陽子(阿部和子・梅田優子・久富陽子・前原寛編)：保育者の協働，保育者論，萌文書林，2012，pp.171-194。
- 稲垣恭子(柴野昌山・菊池城司・竹内洋編)：クラスルームと教師，教育社会学，有斐閣，1992，pp.91-107。
- 伊佐夏実：教師ストラテジーとしての感情労働，教育社会学研究，Vol.84：pp.125-143，2009。
- 管田貴子：外国籍幼児の保育所への適応過程に関する研究－留学生家族の子どもの事例から見えてくるもの－，保育学研究，Vo.44 No.2：pp.104-113，2006。
- 児島明：差異をめぐる教師のストラテジーと学校文化－ニューカマー受け入れ校の事例から－，異文化間教育，No.16：pp.106-120，2002。
- 国立教育政策研究所：外国人児童生徒の教育等に関する国際比較研究 報告書，国立教育政策研究所，2015。
- 宮崎元裕：日本における多文化保育の意義と課題－保育者の態度と知識に注目して－，京都女子大学発達教育学部紀要，No.7：pp.129-137，2011。
- 中坪史典：保育者・教師の感情の表出と抑制から考える保育学と教育学の間，教育学研究，Vol.81 No.4：pp.436-447，2014。
- 中坪史典・金子嘉秀・中西さやか・富田雅子：保育者のストラテジーとしての感情労働－幼稚園の3歳児クラスの分析から－，幼年教育研究年報，Vol.33：pp.5-13，2011。
- 新倉涼子：外国籍児童や生徒の教育に関わる日本人の保育士や教師の異文化間トランス，異文化間教育，No.16：pp.63-77，2002。
- 額賀美紗子：アメリカの多文化教育における教師のストラテジー－「英語を母語としない児童」を対象にして－，異文化間教育，No.17：pp.78-86，2003。
- 大場幸夫・民秋言・中田カヨ子・久富陽子：外国人の子どもの保育－親たちの要望と保育者の対応の実態－，萌文書林，1998。

- 小内透編：在日ブラジル人の教育と保育の変容，御茶の水書房，2009.
- 榊原知美：多文化保育における幼児の自発的な共生方略(第9回東京学芸大学国際教育センターフォーラム発表資料)，2016.
- 柴山真琴：行為と発話形成のエスノグラフィ―留学生家族の子どもは保育園でどう育つのか―，東京大学出版会，2001.
- ト田真一郎：日本における多文化共生保育研究の動向，エデュケア，Vol.33：pp.13-33，2013.
- ト田真一郎・平野知見・臼井智美・戸田有一：多文化化の状況の相違による多文化共生保育実践の多様性のM-GTAによる検討，乳幼児教育学研究，No.24：pp.21-37，2015.
- 清水睦美：教室における教師の「振る舞い方」の諸相，教育社会学研究，Vol.63：pp.137-156，1998.
- 品川ひろみ：多文化保育における保育者の意識―日系ブラジル人児童の保育を中心として―，現代社会学研究，Vol.24：pp.23-42，2011a.
- 品川ひろみ：多文化保育における通訳の意義と課題―日系ブラジル人児童を中心として―，保育学研究，Vol.49 No.2：pp.108-119，2011b.
- 末次有加：保育現場における「特別な配慮」の実践と可能性―子ども同士のトラブル対処の事例から―，教育社会学研究，Vol.90：pp.213-232，2012.
- 内田千春：新人保育者の語りに見る外国につながるのある子どものいる保育，共栄大学研究論集，No.11，pp.273-286，2013.
- 上野葉子・石川由香里・井石令子・田渕久美子・西原真弓・政次カレン・宮崎聖乃：長崎市における多文化保育の現状と展望，保育学研究，Vol.46 No.2：pp.141-152，2008.
- 和田美香：多文化保育特有の保育課題と保育者の支援のあり方(第9回東京学芸大学国際教育センターフォーラム資料)，2016.
- 山田千明編：多文化に生きる子どもたち―乳幼児期からの異文化間教育―，明石書店，2006.
- 山名裕子：多文化保育における幼児のかかわりとことば(第9回東京学芸大学国際教育センターフォーラム資料)，2016.

【謝辞】お忙しい中，調査にご協力いただいた横浜中華保育園の教職員や講師の方々，そして一緒に遊んでくれた園児たちに，心より感謝申し上げます。